

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

Documentation No.7

ドキュメンテーション

■ ドキュメンテーション学会のさらなる発展を願って



7月12日、ドキュメンテーション学科総会

わが国唯一のドキュメンテーション学科が、鶴見大学文学部に誕生して5年目を迎えました。今年の3月には最初の卒業生がそれぞれ希望をいさながら社会へと巣立っていきました。それにともなって、ドキュメンテーション学会の活動も5年目に入りました。この間、本学科の設立に貢献された初代の岡田教授、内容の充実に貢献された二代目の長塚教授がそれぞれ2年間、学科主任と学会長として運営の中心的担い手となり、ご活躍されてこられました。そして、このたび三代目として今年の4月から、私が担当することになりました。会員の皆様とともに、学会の行事や活動内容を一層充実させるとともに、新しい企画なども計画できたらと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

学生の皆さんは、ドキュメンテーション学科に入學されたわけですが、「ドキュメンテーション」という言葉を上手に他人に説明できますか。学科の名称が決まっていたいきさつに関しては、本学会報 No.1 に岡田教授が触れられていますが、私が図書館情報学へ進むきっかけになったキーワードが「ドキュメンテーション」という言葉でした。わが国では、日本語に翻訳することができずに、そのままカタカナで表記されて図書館情報学分野の専門用語として知られていました。

ドキュメンテーションは、情報の生産から利用に至るまでのプロセスとその諸段階で活用される技術すべてを研究対象としています。また、そのようなプロセスの管

理や組織体の経営をも検討の対象としています。歴史的には、ドキュメント（文献）そのものを分析の対象として発展してきたものですが、本質的には文献そのものではなく、そこに含まれる情報が対象となっています。このように、人間が生産するさまざまな情報を再利用するための知の統合を推進する技術や学問的研究がドキュメンテーションの活動範囲ですから、非常に幅広く、また奥も深い分野であると思います。したがって、学生の皆さんは本学科で、ドキュメンテーションの幅広い知識や最新の技術を学習できる環境にいることとなります。

本学会では、ドキュメンテーションに関わる書誌学、図書館学、情報学の3分野の切り口から研究を進めていますが、見学会や講演会もこれらに深く関わる観点から選択しています。今までは教員主導でそれらを企画してきましたが、学生会員や卒業生会員の皆さんからの要望も取り入れたいと思いますので、是非積極的な声を聞かせていただきたいと思います。

今年度も4月に印刷博物館と東京理科大学近代科学資料館の見学会、7月に学会総会と交流会、8月に第6回デジタルライブラリー国際セミナーを開催しました。今後も、会員相互の研鑽と親睦交流が発展していくことを願っています。

ドキュメンテーション学会会長
学科主任

原田 智子 Tomoko Harada

計画を立てる

入学してから前期終了まであっという間でした。19年生きてきた中で、一番早い4ヶ月だったように思います。

4月からの自分の生活をふりかえって、私は今、計画を立てることの大切さを改めて感じています。「何を今更」なことですが、私は計画を立てるのが苦手です。今まで避けてきました。その弱点を長年指摘されつつも、いつかやる、また今度、と先延ばしにして現在に至り、大変なことになりました。気が付いた時には締め切りはもうすぐそこなのです。

7月後半、ほとんど手をつけないままのレポートの締め切りが2日後に迫り、大慌てでレポートについてのプリントを引っ張り出すと、配布日が6月でした。「ああ、このときから準備を進めていればよかった」などと後悔しましたが後の祭です。後悔している時間ももったいない。

この原稿も含め、今回はなんとかすべて締め切りに間に合いました。

私はこの職業につきたいと具体的な夢をもって大学に進んだのではなく、その具体的な夢を見つけるために大学に進みました。特に興味のあることが多く学べそうなこの学科を選び、色々なことに挑戦して、自分の可能性を見つけようと思っていました。その思いは変わっていませんが、そのためにもまずやらなければならないことに気付きました。

計画を立てる、これが今の自分に一番欠けていて、これから先もっとも必要になる能力であることは、先を見通せない私にも明らかです。安定した大学生活を送るためにも、避けずに立ち向かいたいと思います。

古川 森

Shizuka Furukawa

大学生になったという実感

私が鶴見大学に入って、改めて自分が大学生になったのだと感じたのは授業内容でした。高校で習うような科目の英・国・数・理・社の他に、各学科ならではの専門の科目があり、特に必修の宗教学は学生に「禅の教え」を説く授業で、高校の授業では、まず経験のできることではないと私は感じました。

履修科目の選択という、高校生の頃ではまず聞いたこと無いシステムです。私は今まで授業の単位数というものを気にしたことがありませんでした。基本的に毎週・毎日きまった日程の授業をきちんと出席すればよいと考えていました。しかし、大学では必修科目の他に選択科目をいくつか『自分』で選び、それを学校側に申請をするというシステムに変わりました。たとえば授業に全て出席しても、この履修登録の申請を済ませていなければテストを受ける事はできなくなり、もちろん単位を貰う事はできません。

正直私は入学当時、大学という所は高校を卒業したばかりの我々にとって、なんて厳しい環境なのだろうと考えていました。しかし、冷静に考えてみれば、すでに私達は大学生になったというよりも、社会人になる一步手前の段階になったという事です。そのことを踏まえると、いつまでも『誰か』が自分のすべきことを教えてくれると思っているのではダメだという事をひどく痛感しました。

これからは、まだ学生だからという甘い考えを改めて、自分でなんとかする力を付けていかなければいけないと私は思っています。

笹谷 尚弘

Naohiro Sasaya

* 4月4日、入学式後のドキュメンテーション学科の教員・スタッフとの顔合わせ。

不安はゴミ箱へ

大学から合格通知が届き、入学するまでの間、私は度々不安になることがありました。司書の資格を取りたい、司書になりたい。そして、資格を取るにしても、出来れば専門的なことを学びたい。そうした理由で私は大学を選んだのですが、カリキュラムを眺めても専門的で内容が全く想像もつかず、また自分の学力にもいささかの不安があって、不安を拭い去ることができなかったのです。また、友達が出来なかったらどうしようという一般的な悩みもありました。

しかし、いざ入学してみると慣れない生活ゆえに、そんな不安を抱いている時間はありませんでした。最初の2日位は悩んだりもしていましたが、次第に慣れないことだらけで手が一杯になり、それまで抱えてきた不安は頭の隅で埃をかぶることになったのです。

少し落ち着いてきた今、入学当初を振り返ると、不安は全て取り越し苦労すぎなかったといえます。授業も全く解らないという事は無く、友達も出来ました。入学当初よくわからなかった時間割の組み方も、前期で一度経験してみて、履修したい授業に入れられる楽しさを味わい、「大学は楽しい」という言葉の一端に触れました。

サークルにも入り、今では大学生活を満喫しようと胸を躍らせるまでになっているのですから、いつかの不安はきっとゴミ箱へでも投げ込まれてしまったに違いありません。

石村 早紀
Saki Ishimura

文武両道を目指に

鶴見大学に入学して早いもので三ヶ月が経ちました。大学という新しい環境にも慣れて充実した毎日を送っています。

大学は高校に比べると自由な環境でとてもいいところです。しかしその自由に甘えていても誰も注意してくれず、結局自分の首を自分で絞めていることになります。そのため自由に甘えることなく自分に厳しくなくてはいけないと思います。

また大学生活は長いようで短く、4年間をどう過ごすかは自分次第です。自由な時間が多い大学で自分の時間をどう使うかが大事なことだと思います。これからの4年間を何も考えずに毎日過ごすだけではまったく意味のない4年間になってしまいます。そうならないためにも自分なりの目標をたててその目標に向かって努力する必要があります。

私は硬式野球部に所属していて、文武両道を目指に努力しています。大学では野球だけをやるのではなく、大学に入った以上は勉強も頑張りたいと思っています。簡単なことではありませんが、自分で決めた目標は責任を持って達成したいと思います。そして卒業するときに自信を持って頑張ったと言えるように努力していきます。たとえそれが結果としてでなくても努力した過程は自分の力になると思います。

大学ではこれから困難なこともあると思いますが一つ一つ乗り越えて、多くのことを学び、人として大きく成長したいです。そして意味のある大学生活を送れるように頑張っていきます。

川野 圭太
Keita Kawano

新入生の声

1年生・大学生になって



バランスが 大事

宇野 暁央
Takao Uno

2年生になり半年が経ちました。1年生と比べて授業は専門的な内容になり、資格課程の履修教科も増えました。授業開始当初は1年生の時と比べてとても忙しい毎日で専門的な内容の勉強にも苦心しました。正直やっていけるか不安でしたが、内容に慣れていくにつれて忙しいながらも充実した日々が送れたと思っています。あきらめずに授業を受けていくことで自分自身が日々成長していくことが実感できました。

来年の4月にはLA・DDのコース分けがあります。片方のコースを選択したからといって、もう片方のコースの内容を学べないというわけではありませんが、このコース分けは自分の将来にも大きな影響を与えるものだと考えています。そのためにも今のこの時期はとても重要な時期であると捉えています。

今の私はいろいろなことに興味がありすぎて道を一筋に絞れず、「好きなことはわかっているけれどやりたいことは見つからない」というのが現状です。今は少しでも多くの知識や技術を修得し、自分自身を向上させていきたいと考えています。そのために大切なのはバランスだと思います。常にモチベーションを維持することはとても難しいので、趣味やアルバイトなど他のことをすることも大切です。しかし、学生は自分で考え、自分の意志で行動していかなければなりません。そのためにも物事に対するバランスはとても重要だと思います。物事のバランスをうまく考え、半年後、卒業後と将来的に悔いの残らない道に進んでいけるように努力していきたいと思っています。

学生の 声

2年生・専門科目／コース選択／クラブ活動…

2年生になって 先輩になって

山内 悠加
Yuka Yamauchi



1年の時はパソコンに基礎中の基礎を中心に学び、難しいことはあまりなく、授業についていけないということはありませんでした。しかし、2年になった途端に専門の授業が増え、授業についていくのに四苦八苦するようになりました。けれども、今まで自分が知らなかったことにも出会えるので、毎日がとても充実しています。特に図書館学に関しては、ドキュメンテーション学科に入学するまでは学ぶ機会がなかったので、毎回の授業がとても楽しみです。

また、2年になるとコース選択についても考えなくてはなりません。私はこの学科に入った当初は図書館司書になりたくて、LAコースに進もうと考えていました。しかし、1年間授業を受けてみて、DDコースも面白そうだなと思うようになりました。3年になるまで残り約半年、じっくりと考えてみようと思います。

部活動（演劇部・文芸部）では大学に入って初めて後輩ができました。「先輩」という立場になり、去年と違う自分の立ち位置に戸惑うことがあります。これが2年生になることだと実感させられ、今の後輩が1年前の自分だったんだと懐かしくも感じます。

2年生になると、自分の周りのありとあらゆることが色々と変わっていきます。授業が難しくなり、部活では先輩になり、本格的に大人にもなっていきます。変わっていくということに戸惑いを感じますが、同時に楽しみでもあります。

色々大変ですが、それでも負けずに充実した大学生活を送っていこうと思います。

学 体
習 験

社団法人温古学会 塙保己一史料館

「江戸時代の版木を摺ってみよう」に参加

2008.8.2

社団法人温古学会塙保己一史料館が主催する体験学習「江戸時代の版木を摺ってみよう」に、昨年に引き続きドキュメンテーション学科の学生が参加しました。

「御江戸図説集覧」（渋谷区指定有形文化財）や「元暦校本万葉集」（東京都指定有形文化財）といった版木を摺るといふ貴重な体験をさせていただきました。繊細に彫られた文字や線をきれいに摺り出すことが、いかにむずかしいことであるかよくわかりました。刷り上がりに満足のいかない学生は時間いっぱいまで何度も挑戦していました。



版木印刷？ 図画工作でやったのと同じようなものか、などと思う人は、実際刷毛と馬連を手一枚刷ってみるといい。墨の塗り具合や紙を乗せる位置の調整がいかに難しいものか。上手く刷り上げられた時のよろこびがどんなものか。自らの体を動かして体験した人間にしかきっと分からないだろう。

後輩諸君、学校の授業だけで満足するなかれ。踏み出せば必ず、新しい発見が待っている。（3年・仲戸川莉沙）

墨を塗り、和紙を乗せ、擦る。その工程が難しく、何度も失敗してしまいましたが、その分、上手く刷れた時は声を上げてしまいました。また、頭の中の地図と、版木の地図との違いに驚くと共に、知っている地名等を見付けると、不思議と嬉しくなりました。次の機会に恵まれたら、是非また参加したいと思います。（1年・石村早紀）

塙保己一について話を聞き、保己一が作った版木を見せてもらい、実際自分で摺ってみて、綺麗に摺れたのでゴさを実感しました。小学校の授業でやった版画を思いだして楽しかったです。しかも、綺麗に摺れないと悔しいので熱中してしまいました。（3年・古市真美）

R.Netz and W.Noel

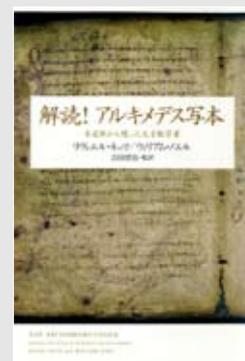
『解説！アルキメデス写本 ―羊皮紙から甦った天才数学者―』

（光文社 2008 吉田晋治監訳）

現実とは小説より奇なり。数奇な運命を辿った写本（パリンプセスト）が、大富豪、学芸員、数学者、工学者らの手によって、現代の私たちに古の知識を蘇らせる。まるでドキュメンテーション学科で学ぶ内容の物語である。ドラマチックな発見物語の展開、解説に奔走する研究者、そこから浮かび上がる美しい数学の概念。面白い。今すぐ読もう。解説で使われた電子化の手法は授業にも出てくる。ちなみに、原書の方が編集者の熱意が伝わる。（大矢一志）

* 鶴見大学図書館の請求記号は 410.23/H（開架・一般）

BOOK REVIEW



マークアップ言語のグリーナ

Gleaners of Markup Languages

大矢 一志
Kazushi Ohya

No.3 データ派とテキスト派

派閥争いというわけではありませんが、マークアップ言語を使う人達は、いわゆるデータ派とテキスト派という、2つの立場に分かれてマークアップ言語を利用している、といわれています。例えば、web ページを作るマークアップ言語である HTML をこの2つの立場から分けるとすれば、データ派の立場で作られているといえます。

いわゆるデータ派では、単位化されたデータが先ず存在していて、それを XML などのマークアップ言語で記述する、というスタンスを採ります。この人達は、必ずしもマークアップ言語を使わなければならない、という訳ではありません。エクセルやもっと高度な DB を使ってもよいのです。ですから中には、仕方なく XML を使っている、という人もいます。大学の言葉を使えば、データ派は「データ単位がア priori に存在する」という立場になります。

一方、テキスト派では、のんびんだらりとしたテキストが先ず存在していて、そこには区切られたもの、すなわち単位化されたデータはありません。マークアップ言語を使いながらデータを書き出す、というスタンスが採られています。すると、この人達にとってマークアップ言語は、データを作る(切り出す、単位化する)ための、欠くことのできない道具になっています(マークアップ言語を使わないとどうなるか、これは別の機会にしましょう)。大学の言葉を使えば、テキスト派は「データがア posteriori に存在する」という立場になります。

マークアップ言語がこのような2つの派で利用されるようになった理由は、前回紹介した歴史的経緯があつてのことです。コンピュータは、「デジタル」つまり「離散的なもの」「バラバラになっているもの」を扱う道具です。計算機科学が情報を扱う際には、既に「バラバラの状態にある情報」をデータとして扱うことが前提となっています。マークアップ言語が SGML を境に DB と連携するようになってからは、既にあるデータをどう記述することで処理が容易になるか、ということが検討されてきました。例えば、ファイルの中にどのようなデータ単位が存在するのかが既に分かっているのであれば、その情報を用意しておけば、コンピュータは素早く正確に処理することができます。このような「存在するデータ単位の情報」が書かれているデータのことを「スキーム (Scheme)」といいます。DB として XML を使う場合には、スキームデータを用意する必要があります(ちなみに、DB 系の人達はスキームのことを「スキーマ (Schema)」ともよびます)。

一方、マークアップ言語は、印刷する為にも使われていました。例えば、改行しておきたい場所に、そのようなコメントをタグで書き込んでおきます。このように、ある場所にコメントを残す行為のことを「注釈付け」「アノテーション (annotation)」といいます。これは、わたしたち人類が記号を使って記述するという行為の、最も基礎的(原始的)な要素になっています。

図 1



このアノテーションという行為は、人文学の分野において大変重要な行為です。例えば、本文に注釈を付けたり、用語を解説したり、大きくいえば書評そのものも特定書籍に対する注釈といえるでしょう。この重要性は、人文資料を電子化する場合でも同じです。例えば、図 2 では

図2

```
<title>
<seg xml:lang="ja-Jpan">鶴見大学</seg>
<seg xml:lang="ja-Hira">つるみだいがく</seg>
<seg xml:lang="ja-Latn-x-hepburn">tsurumidaigaku</seg>
</title>
```

タイトルに書かれている文字列が表音記号(読みを示す文字)なのかどうかを、属性 `xml:lang` で注記しています。例えば、図3では、元の資料で消えかかって読めない部分を電子化する際、何故データが入力されていないのか、それが元資料ではどのようなになっているのかという情報も記録しています。

図3

```
<p>財宝は
<gap reason="読めない" extent="3" unit="chars">
擦られて消えている</gap>に埋めておいた</p>
```

このように、マークアップをのんびんだらりとしたテキスト中へ注釈を加える為に使えたとすると、例えば図4の様に

図4

```
<l>歩如歩如歩如魚の個
<ToDo>誤変換だと思うので、後で確認すること</ToDo></l>
<l>青い海からやってきた</l>
```

気が付いたところに付箋を貼るような書き方もできるはずですが、このようなマークアップ言語の使い方をすると、どのようなタグがどこに付けられているのかは、書き始める前から分かるものではありません。また、一度完成したデータでも、その後タグが消されたり、追加されたりする事もあります。つまり、スキームを一定させることがとても難しいのです。ここに、人文資料を電子化する際の難しさがあります(これにどう対処するのか、これは別の機会にしましょう)。

XMLは、この2つの派の人達が同時に満足できる仕組みを採用しました。XMLでは、スキームを指定する必要はありません。このようなXMLデータを「well-formed(整形形式)文書」といいます。つまり、必要なときに自由にタグを付けることが認められています。もし、XMLデータファイル中でどのようなタグが使われているかをスキームデータで明示したいのであれば、スキームの指定法を選択し、それをXMLデータ中で宣言します。このようなXMLデータを「valid(妥当な)文書」といいます。ちなみに、現在、主なスキームの指定法には、DTD、XML Schema (XSD)、Schematron、RelaxNGの4種類があります。どのスキームを選んでも構いませんが、もしこれからXMLを勉強しようというのであれば、まずはDTDから調べるとよいでしょう。DTDには、いろいろと問題があるといわれていますが、歴史上、XMLはこのDTDを前提に作られてきましたので、これを先に学んだ方がよいと思います(実際に使うかどうかは別の話です。また、多くの場合、DTDで十分です)。

最後に、前回の補足をひとつ。話の中にある「電子計算機」は「半導体を使った計算機」を指すもので、「真空管(という部品)」を使ったものは指していません。現在のタイムスパンからすれば、あれは「電気時代」のものでしょう。

私は、現在3年生になりました。入学当初は右も左も本当に分からないような状態でしたが、3年生になってやっと落ち着いてきて、周りが見られるようになった気がします。

ドキュメンテーション学科に入学するキッカケとして「パソコンについて学びたい」という気持ちが強くありました。DDコース、LAコースを選択するときもその気持ちが最優先となり、DDコースを選択しました。ですが、少し迷う気持ちもありました。LAコースの講義も受講することにより視野が広がり、パソコン以外のことも学びたいという思いが沸いていました。先生方や友人たちにも相談を持ち掛けたこともあります。迷った結果、DDコースを選択することに決めました。理由は、将来的に就きたい仕事にどちらのコースの方がより関連しているかということでした。今日まで勉強を続けてきたということは、就きたい仕事に就くためという要素も多分に含まれていると思ったからです。

このように殆どどの生徒がコース選択には迷ったのではないかと思います。本当に大切なのは自分がどうしたいか、どうなりたいかであり、他人にそれは決められません。大学に入学してからは、高校や中学校と違って自分で物事を判断し、決断する機会が増えます。コース選択を含め、どの講義を受講するかなど多々あると思います。その時に大切になるのは自分の気持ちがどうあるか、ということが一番大切なポイントですが、沢山のの人に相談し、いろいろな意見を聞くことも大切だと思います。いろいろな意見を聞き、吸収して整理すれば自ずと最善の答えが出ると思います。その末に出た答えに、後悔はないのではないかと思います。悩むことは悪いことではなく、周りやどうあれ自分が納得するまで悩むべきです。

何だって頑張ったから頑張った分だけ報われる訳ではないし、その頑張りが直接結果には結び付かない時が沢山あると思います。すぐに結果が出なくても、結局最後まで上手くいかなくても、それでも私は良いと思うし、無駄骨だったとも時間の無駄遣いだったとも思いません。肝心なのは結果ではなく目標までのプロセスであり、どれだけ自分が努力したか、また必死になれたかということだと、そう思います。もし思うような結果にならなくても、そのプロセスにあった努力や苦しかった経験は、絶対にいつか次に繋がるはずで、何事も頑張るのは当たり前で、頑張ったその先に何かを見付け、何かを得、少しでも目標に近付けることが重要で、完璧である必要はないと、最近思えるようになりました。以前までは、結果が全てだと思っていた自分がいました。意味のないように思えることでもとりあえず手を出してみるというチャレンジ精神もこの3年間で培われたのではないかと思います。

長々と述べてきましたが、この先に立ちほだかっている「就職」という大きな壁に正面から立ち向かっていけたらと思います。

プロセスを大事に

杉本 昌通
Masamichi Sugimoto

学生の

声

3年生・コース選択／資格課程…

大学生は楽だなんて誰が言ったんだ。大学3年春、私はそう思った。授業数は段々減っていくものだとも聞いた気がするが、変わっていないどころか、むしろ年々増えているようにさえ感じる。原因は分かっている。課題の量だ。

3年にもなると授業は専門科目が多く、今までの応用をしてみせろと言わんばかりに演習が幅を効かせ始めた。それに加えて、教職と司書の資格課程を履修しているのだから、単位に算入されない授業もある。勉強は得意でないから、絶えず睡魔との戦い。意味の分からない専門用語は、最強の催眠術であろう。

私には「将来の夢」という、「就きたい職業」がない。好きなことを仕事にできたらとは思っているが、具体的な職を考えてもいない。資格を取ろうとしているからといって、本気で図書館司書になりたいわけでも、教師になりたいわけでもない。正直に言って、一つでも資格科目を落とそうものなら諦めてしまいそうな程度にしか、資格取得にも熱心でないのだ。

ないない尽くしだけれど、一つ目標としてあるのは、「大学生活を無駄な時間にしなさい」ということ。明確な目的も持たずに進学して、もう3年。相変わらず、勿体ない日々の使い方をしていて、それでも多少は知識もついたはずで、何より私は「今この時」を有効に利用することに関心があるのだ。その関心が眠気に勝つにはまだまだだけれど、最低限の努力はする。資格を取ることは、大学生活の結果を見えるものにするため。見えないものは知識として、これから先で就く仕事等で活かしたいと考えている。

これから就職活動が始まる。今までは避けてこられた職業選択から、今度は逃げられない。学んだことを役立てるため、少しでも選択肢を広げるため。それには、インドの地名を調べたり、トムになりきって英語でメールを返信したり、パソコンで呪文のような文字を打ったりすることも必要なのだ。そう自分に言い聞かせて、きっと後一年半、頑張りたい。

今を有効利用する

益子 優海
Yuumi Mashiko

継続は力なり 市村 希 Nozomi Ichimura

■資格合格体験記

平成19年10月某日「学生の内にパソコンに関する資格を取っておきたい！」私はそんな軽い気持ちで友達と元木先生の所へ相談に行きました。そこで勧められたのが初級シスアドという国家資格です。初級シスアドとは企業内の業務の情報化を利用者の立場から推進する役割を果たす人の資格で、ある一定の知識や技能を必要とされます。試験は春期と秋期に行われるため私は平成20年春期の試験を目指して勉強する事になりました。

最初は先生のアドバイスをもとにインターネットで過去問題が載っているサイトを見てひたすら問題を解きました。シスアドの試験は過去問題からの出題が多いので今までの問題を解いていくことが重要になります。勉強開始当初の私には問題の意味を理解することすら難しいものばかりでしたが、自分なりに調べたり、テキスト購入後は頻出問題を単語帳に書き出して暗記したりと、勉強する内に少しずつ理解できるようになっていきました。

1月からは元木先生が開いて下さった試験対策講座に参加し、分からない過去問題の解説を聞いたり、受験者同士で勉強の進捗状況を報告したりと、試験に対する士気も徐々に上がり10月に相談に行った時の軽い気持ちは吹き飛んでいました。

私は力が入り始めた1月からはほぼ毎日テキストとにらめっこ状態でしたが、総勉強時間はそれ程多くないと思います。「継続は力なり」と言いますが正にその通り。1時間しか時間が取れない日があっても毎日続ければ試験に合格できる程の力となります。今シスアドの勉強をしている人は毎日少しずつでも勉強を続けて下さい。そしてシスアドの試験を受けようか迷っている人は是非チャレンジしてみてください。国家試験の雰囲気を知ることができ、合格すれば自信がつかます。時間のある学生の内に頑張ってお得しましょう！





就職活動に 卒業論文に

良岡 淳一郎
Junichiro Yoshioka

私にとって大学4年の前期は、想像以上に忙しいものでした。就職活動にせよ卒業論文にせよ決して楽なものではないことは理解していたつもりですが、それでもいざ実際にやってみるとその困難は予想以上ものだったのです。

まず就職活動ですが、春休みの私は屍の様なものでした。今になって振り返ってみても、いったい何故あそこまでモチベーションが落ち込んでいたのか解りません。3年の夏休みにはインターンシップに

参加していましたし、年末年始の就活イベントにもきちんと顔を出していました。春休み直前には就活への意気込みも最高潮に達していたのです。そう。直前まではやる気があったはずなのです。直前までは。

ふと気が付けば4年生でした。本命だった企業はその時点で軒並み落選しており『ああ困ったな、北海道でも行きたいな』と現実逃避しているうちに5月。さすがに危機感を感じ『給料がある程度貰えて、休日がきちんと貰える企業ならどこでもいい』と就活してみたところ、5月の頭に動き始めその月の終わり頃には内定を頂けました。レポートの締切直前の集中力と同じ話ですが『もっと早くあのやる気を出せていれば』と思わずにはいられません。

就職活動と平行して研究することになった卒業論文ですが、ゼミの担当者である堀川先生には、就活で授業に出席出来ない日などは別の日に相談に乗ってもらえたので、両立することに対する困難はあまり感じませんでした。問題なのは卒論そのものの難しさです。LA関係の卒業論文を書くことになった私は、とりあえず先行研究に関する論文などを読みあさる必要がありましたが、その量が尋常ではありませんでした。先生の助言や既読の論文などを参考に、どうにか絞って読んでいますが、一冊読み終える度に、次に何を読むか考える様な日々が続いています。

■卒業生から 熟慮断行

森田 嗣正 Tsugumasa Morita 平成19年度第1期卒業生

皆さん初めまして。平成20年3月に本学を卒業しました、森田嗣正と申します。

私は現在、神奈川県内の高等学校で教科情報の講師として働いています。働き始めてから早3ヶ月が経ちましたが、改めて教職という道を選んだ良かったと感じています。良かったと思える点は2つあります。1つ目は「勉強をする楽しさ」を実感したことです。わからない内容や問題が出てきても、図書館を利用したり、様々な参考書を読めば時間はかかっても理解することはできると確信できたからです。そして、生徒にどのような授業を展開すれば楽しくなるか、と考えながら勉強しているうちに楽しくなってきたという事がありました。2つ目は「人と関わることの楽しさ」を覚えたことです。生徒の笑顔や「ありがとう」と言う言葉を聞いた時には何とも言えない熱い気持ちが入り込んできました。どんなつらい事があっても頑張れる無限の力をもらうことができます。衝突することもあります。じっくり話せばわかってくれます。

自分に合っている仕事かどうかは就いてみないとわかりません。私は偶然巡り合うことができたため今とても幸せです。勿論、紆余曲折もあり、最終的に進路が決定したのは卒業2ヶ月前でした。しかし、「やってみたい事」を選択することはできます。周りの雰囲気、焦って進路を決定してしまう学生を見ると、とても胸が痛みます。本学内には力を持った方々は大勢みえます。本学科の元木先生を始め、ドキュメンテーション学科の先生方、就職課や面接講座の先生にもとてもお世話になりました。たった一度の人生なので周りとは対立しながらでもじっくり進路を考えて切り開いてほしいです。



最後になりましたが、教員を目指されている方へ。教科「情報」の免許一つでは、正規の職員になるのは難しいです。情報の授業数は少なく、他教科と掛けもちをされている教員が多数をしめます。教員を目指されるなら、卒業後に通信制の大学で、働きながら他教科の免許を取得するをお勧めします。私も現在働きながら通信制の大学に通っています。長い道のりになると思いますがそれだけの価値はあると思います。お互い頑張りましょう。

私はこの6月に教育実習に行ってきました。

実習期間中は毎日学校が閉まる時間ぎりぎりまで残って次の日の準備をしたり、実習録を書いたり、本当に目まぐるしい2週間でしたが得る物も充実感も満点でした。

人に何かを教えるというのは、やはり自分でやってみないとわからない大変難しいものだと実感し、そしてそれ以上に面白いものだなと思いました。高校生が何をして欲しくて、どんなことがしたいのか、間近で見ることができたとても良い機会でした。

教職課程は、通常よりも多く授業を取らなければならなかったり、それが卒業単位に絡まなかったりで、なかなか続けていく気力が続かないこともあるでしょう。けれど、それだけに充実感や成し遂げた感は大きく感じるのではないのでしょうか。今まで見えなかった世界が見えてきて、私は非常に面白かったです。

大学で学ぶということは、世界が広がるということです。自分の世界を広げるために大学で勉強をしているのだと思います。4年生になった今、正直自分が成長したのかなんて実際自分でも分かりません。でも、4年間私が勉強してきた分の世界は広がって、これからも学べば学んだ分広がってゆくのだと思います。

来年からは社会人で、いろいろな責任も自分でおっていかなければならない立場になります。それでも臆することなく、興味を持って自分という世界を広げて生きたいと思っています。



世界を広げる

豊部 祥子
Shoko Toyobe

4年生・就職活動／教育実習／卒業論文…

私は2週間の教育実習期間中にいろいろな事を経験し学ぶことができました。

教育実習に行く前は、生徒に自分が知らない質問をされて答えられなかったらどうしよう、自分は生徒にしっかり授業をすることができるのか、いろいろな不安でいっぱいでした。しかし、実際に教育実習が始まると実習前に感じていた不安を感じる暇もなく毎日が忙しく過ぎていきました。

実習を行っていく中で同じ教科の先生方から日々多くのアドバイスを頂くことが出来ました。なかでも人に何かを教えるときには、その教える知識の何倍も自分で理解していないとうまく教えることが出来ないことであったり、ただ自分が生徒に教えたいことを一方的に話すのではなく生徒が理解しているか、集中しているかなどを見ることの大切さを学びました。その他にも授業見学などで先生方がどのようにして生徒を引きつけ授業に集中させているかなど、実際に授業実習で学ぶことも多かったのですが、この授業見学で多くのことを吸収し、それを授業実習に生かすことが出来たと思います。

また教員の一日を体験することによって教員が普段生徒の見えない部分で行っている仕事の大変さも感じました。生徒が宿題プリントの採点、授業の準備など生徒の見えないところでの仕事がとても多いということも知りました。

私がこの2週間で体験してきた事は実際の教員の仕事内容のほんの一部かもしれませんが、しかし自分にとってこの2週間という期間は教員を目指すにあたりとても充実したものになりました。

学生の声

多くを吸収した 2週間

相沢 貴彦
Takahiko Aizawa



平成 20 (2008) 年 3 月 - 8 月

ドキュメンテーション学科・学会活動報告

3月14日(金)

平成19年度卒業式

ドキュメンテーション学科の第1期生が卒業してきました。雨の降る卒業式でしたが、卒業証書を一人一人教員から手渡すころには雨もあがって、明るくなり、卒業生の前途を象徴するかのようでした。



4月4日(金)

平成20年度入学式

新入生73名が、この日新たに仲間に加わりました。翌5日にはノートPCの貸与説明会が行われました。



4月26日(土)

印刷博物館見学会を実施

新入生を対象とした印刷博物館(東京・飯田橋)への見学会は学科の恒例の行事になっています。常設展

の見学だけでなく、印刷工房では活版印刷の体験をするなど、有意義な時間を過ごすことができました。見学会終了後は、希望者は東京理科大学近代科学資料館へも見学へ行きました。



5月12日(月)～6月23日(月)

特別実習(インターンシップ)事前指導を実施

4回にわたり、ビジネスマナー、ビジネス文書の書き方等を学びました。夏休みには11名の学生が実習に参加します。秋には報告会を予定しています。

7月12日(土)

ドキュメンテーション学会総会・交流会を開催

昨年度の活動報告、会計報告の後、今年度事業計画が検討、承認されました。秋以降も講演会や見学会が等多数の学会活動が計画されています。総会後は学生交流会を開きました。全学年の学生が集まる交流会は、貴重な情報交換の場ともなっています。また、この3月に卒業した先輩たちも駆けつけてくれました。

8月2日(土)

体験学習「江戸時代の版木を摺ってみよう」に参加

社団法人温古学会塙保己一史料館が主催する夏休み体験学習「江戸時代の版木を摺ってみよう」に学科の学生が参加しました(詳細は5ページに)。

※活動報告の詳細は学科ホームページ(<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/docu/>)でご覧になれます。

■第8号は2期生の卒業を記念した特集号です。インターンシップの報告会の様子もお伝える予定です。原稿・写真を募集しています。編集委員へお問い合せ下さい。

■編集委員

〔学生〕^{2年}水島 康・山内悠加・^{1年}稲垣康寛・中島史織

〔教員〕岡田 靖・伊倉史人

ドキュメンテーション 第7号

平成20(2008)年9月9日(火)

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会
横浜市鶴見区鶴見2-1-3(〒230-8501)

☎045(581)1001(代表)発行責任者:原田 智子

<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/docu/>

*ホームページのURLが変わりました。